過去を反省し「医の倫理」は人権擁護の観点で

「日本医学会総会2015関西」に対するアピール企画を開催

医の倫理―過去・現在・未来―企画実行員会は4月12日、「歴史を踏まえた日本の医の倫理の課題」を開催。定員を大きく超える347人が出席した。同時にインターネット配信も行われ518人が視聴、リアルタイムで計865人が参加した。同実行委員会は、協会の垣田さち子理事長が代表を、吉中丈志・飯田哲夫理事が副代表を務めるなどしている。今回の企画は、京都で3回にわたり開催された「医の倫理ゼミ」など、日本医学会総会2015関西に向け近畿各地で行われた一連の取組みの集大成と位置付けられたアピール企画である。

真剣に耳を傾ける参加者（知恩院・和順会館ホール）

731部隊の全容に迫るドキュメンタリーを上映

催しは午前と午後の2部構成。午前は垣田代表のあいさつの後、元テレビ朝日報道局報道センター特報部ディレクターで、現NPO法人731部隊・細菌戦資料センター共同代表の近藤昭二氏の解説により2本のドキュメンタリービデオ「日本陸軍の深い闇　陸軍731部隊の真実」「許されざるメス～九州大学生体解剖事件～」が上映された。

執筆を振り返り731を考察

続いて『731―石井四郎と細菌戦部隊の闇を暴く』の著者で、ニューヨークで活動するジャーナリストの青木冨貴子氏が「731部隊の戦後と医の倫理」と題した特別講演を行った。青木氏は、米国が手に入れていた731部隊の研究レポートを発掘したアメリカ人ジャーナリスト、ジョン・パウエル氏との出会い、石井四郎氏が密かに残した2冊の「終戦メモ」を入手したことなどが大きかったと、執筆の過程を振り返った。

そして、この課題は決して終わっていない。日本だけでなく、各国とのネットワークを構築し、真実の追求および解決に向けた研究が必要な時代になってくるのではと述べた。

過去と真摯に向き合う姿勢を

さらに、精神科医で立教大学現代心理学部教授の香山リカ氏の司会で青木、近藤両氏による対談が行われた。近藤氏は、731部隊について、ソ連対日参戦により撤退が図られ、大本営参謀の朝枝繁春氏から証拠隠滅が命令されたこと、石井四郎氏が撤退を前に秘密を守るよう部隊に伝えたことなどから日本における資料等の入手が極めて困難な状況であり、取材は断片をつなぎ合わせるような作業であったとの体験談が話された他、青木氏は石井氏らが密かに残した731部隊の資料を巡っては、米ソ2大国による入手に係る駆け引きがあり、当時の部隊幹部たちが結果として戦犯訴追を免れることとなり、戦後も日本医学界の要職に就いていったものが多数であったこと。石井四郎氏自身も含め、その後に倫理的な反省を感じていたかどうか実際のところは不明であること等、戦時下に行われたことが、整理・完結されていないことは問題とした。香山氏は、時間とともに戦争体験を直接伝えられる人が少なくなる中、今後もメディアが取り上げていくことが重要と締めくくった。

（上から）講師の青木氏、対談者の近藤氏、対談司会の香山氏

主張

社会保障は地域を活性化する

地方へ行くと商店街はシャッターで閉められ、人々の往来も少なく驚かされる。一方、大型のショッピングモールに行くとキッズコーナーやゲームセンターが充実していて、子どもたちが楽しげに飛び回っている。フードコートでは、家族連れで食事をしている。

どこの町に行っても、同じような風景を見ることができる。少子高齢化でこの町は大丈夫なのだろうか。

TV番組の「ケンミンショー」ウのような、この町の独自の食べ物や習慣はなんだろうと思う。大きな工場や産業がなければ、この町もなくなってしまうのか。伝統産業をコツコツしていけばいいのだろうか。

ご先祖様から頂いたこの土地を離れたくはないが、息子や娘は大都会に行って帰ってこない。町が活性化したら、子どもも戻ってくれるかもしれない。町おこしもしたくても、今の自分では腰も足も動かないし、嫁も車イスだ。そういった声を聞くこともある。

それでも町おこしはできると私は言いたい。みんなで医療、介護、子育て支援などのサービスのネットワークを作り徹底的にやれば、町は必ず活性化し、人々も安心して暮らせる。そんな町には人が集まり、経済も活性化する。なにも伝統的な祭りや新しい祭りをしなくても、町おこしはできるのだ。

新しい老人保健施設や特養を作らなくてもいい。町全体が老健や特養であり、子育て支援センターなどだから。その原資はどこにあるのか。みんなでわずかの金額を出し合って基金とし、元気な人は医療・介護の手助けをして町おこしクーポンを手に入れる。このクーポンは自分が医療・介護を受けるときに自己負担を割り引いてもらうものとする。暮らしやすく、人にやさしい町ならだれでも住みたがる。

そして、ネットワークの核となり、町おこしのキーパーソンになれるのは、我々開業医だ。

（2面につづく）

代議員

議長・副議長決まる

議　長　岡田　楯彦（中京西部）再
副議長　茨木　和博（綴　喜）再
　　（敬　喜）
（敬称略）

代議員会議長、副議長の選挙公示を4月20日（**本紙2926号既報**）に行い、立候補届を27日午後4時に締め切ったところ、それぞれ定数内の立候補であったため、投票を行わず立候補者をもって当選人と決定した（選出内規第16条）。任期は2015年5月1日～17年4月30日まで。

なお、同規定により臨時代議員会は開催しない。

京都保険医新聞

購読料　年8,000円
送料共 但し、会員は会費に含まれる

発行所
京都府保険医協会
〒604-8162
京都市中京区烏丸通蛸薬師上ル七観音町637
インターワンプレイス烏丸6階
電話（075）212-8877
FAX（075）212-0707
編集発行人　久保 佐世

主な内容

地区医師会との懇談（中東、相楽）（3面）
事故調 原因究明・再発防止求めて（4面）
バイバイ原発で小出氏講演（6面）

ご用命はアミスまで
◆医師賠償責任保険
◆休業補償制度（所得補償,傷害疾病保険）
◆針刺し事故等補償プラン
◆自動車保険･火災保険
☎075-212-0303

医界寸評

3月3日ひな祭りの日、ラストランを9日後に控えた「トワイライトエクスプレス」車中の人となった。26年来の憧れに昨年末からチャレンジし、二度にわたって冬の日本海気候に阻まれて運休の憂き目に遭い、まさに三度目の正直（一歩間違えば二度あることは三度ある）であった。食堂車「ダイナープレヤデス」クルーの素晴らしいチームワークによる行き届いたサービスの心地よさに、「なんでもっと早く乗らなかったのか」と自責の念に駆られた▼「チームワーク」。昨今医療や介護の分野でも、今更ながら声高に叫ばれている言葉である。今春の介護保険報酬改定では、これに冷水を浴びせる対応がとられた。「介護職員処遇改善加算の見直し」である。「現代の3K職場」とされる介護現場離れを改善する方策のはずが、現場に無用の軋轢を生む内容となっている▼対象が高齢者であれ、障害を持つ人であれ、介護現場は介護職員のみで成り立っているのではない。生活相談員、ケアマネジャー、医務職員、調理職員等々まさに多職種協働体なのだ。なのにこの加算での収入は、介護職員のみに限定して配分すると規定されている▼チームとしてケアに携わっている他職種のモチベーションを萎えさせてしまうものでしかない。いつもながらの現場を知らない机上理論に怒り心頭の日々である。（呑鉄童）